

エイムズ唯子の「心理学 周辺」

第4回：「新しい物語と生きる」の巻



これを書いているのは4月18日で、原稿のしめきりを3日過ぎている。連載がはじまってまだ数回しか書いていないけれど、それにしだってこれまでは、アイデアがけっこうひとりで浮かんできたから、それをゆっくり手繰りよせれば、なんとか書けていた。今回は、どれもこれも、ぶつん、ぶつり、と切れてしまって、どうしてもつながらない。



「ぶつんする」という言葉が流行ったのはいつだったか忘れたけれど、3月11日の早朝、私の胸にこだました、なにかがぶつんと切れた音はまだ響き止んでいない。そのとき私は、日本からマイナス17時間時差のあるアメリカ西部の町にいて、夫の両親と春休みを過ごしていた。いつになくこわばった義父の声に起こされて事態を把握したとき、朝陽は輝いていたが、世界は暗転していた。日本時間11日の午後3時ごろ、成田空港へ向かっていたはずの夫とは、連絡がとれていなかった。

家族。仕事。友達。安全。帰るはずだった卒業式。あの時ぶつんと切れたのは、ささやかでも珠玉の幸せを一つにつなぎとめていたはずの、なにかだった。さっきまで、平和なる物語を飽くことなく再生していた、旧式のオープンリールの細いテープが突然切れた、あるいはそんな感じの「ぶつん」。原発も、平和なる物語のひとつだった。私を含めた多くの人が、その物語がぶつんしたら、大変なことになると、うすうす知っていた。でも、大丈夫、ぶつんしません、という、親切な誰かがつくってくれた物語のなかに生きていたのだ。

ブルーナーという心理学者は、生きていく限り、私たちには「物語」が必要なのだといった。人間が社会や文化という大きな構造を捉えようとするときには、物語という認知の力を使うという。人間の生は、物語的な認知や思考のなかで生きられるものであって、それらの物語によって意味を構築することなしに、私たちは生きて、前に進むことはできないと。フェスティンガーという別の心理学者は「認知的不協和」という言葉で、物語の不完全さを説明しようとした。認知Aと認知Bが矛盾するとき、私たちの心はその不協和を解消するために、新しい物語を編み出す。たとえば、「ここは危ない」が認知A、「私はここにいないから危ない」が認知Bなら、そこで生み出される新しい物語は、「ここは、きっと、そんなに危なくない」。

私は、不意にちぎれてしまった物語を前に、困惑している。私がここにこうしていることの意味をもう一度探し出し、ひとつずつつなぎあわせて、物語を続けたい。私にできることを見つけ、希望を抱くことができれば、新しい物語だって始められるかもしれない。互いの物語に耳を傾けあい、分かち合うことによっても、物語は力を取り戻し、私たちを励ますだろう。ぶつりと切れるたびに、人間は、辛抱強く、全力で物語を守り、語り伝え、新たに創造しながら生きてきた。私たちにも、それができるはずだと信じたい。



モザイク壁画になった子どもの絵（神戸震災メモリアルパークにて、2010年5月撮影）

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）